

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Professor Kondo Yoshiharu and his footsteps

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前山, 誠也, Maeyama, Seiya メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/477

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



近藤義晴さんの処方箋

前 山 誠 也

近藤先生が退職された。

何か変である。書き出しの言葉が進まなくなった。---

先生はよそう。先生と私では、そんなに、歳も変わらない。いつも通りで行こう。リセット、やり直し。近藤さんは退職されてしまったのですね！

近藤さんと私、あと二人の同僚教員は、長年、一つの研究会で集まりをもっていた。いづらか年少の二人は、ときに、近藤さんを、晴れやかに、「こんちゃん」と呼んでいた。こんな二人も、大学を移って、今は外大にいない。

私は近藤さんを「こんちゃん」と呼んだことはない。近藤さんは、いつも、私のすぐ前を走っていたからである。近藤さんの背中を追う私には、近藤さんの半面がちゃんとは見えなかったのだろう。以下の近藤さんは、そんな私がみた個人的な記憶の限りでの近藤さんである。

近藤さんは、どんな人だったのだろう。

若い頃の近藤さんの仕事はドイツのハントヴェルクの研究から始まった。近藤さんといえば、現在、まずは、ハントヴェルク研究の日本における第一人者ということで通るようになった。とはいえ、日本の経営研究者の関心は、もっぱら、日のあたる大企業の経営の側に向かいつつある時代であった。間近にいた私にも、長らく、ハントヴェルクとは、ドイツにおける中小企業のことかなという以上には、近藤さんが目指されていた課題、ポイントが、も

う一つ、分からなかった。近藤さんの思い出を綴るには、このあたりの不明の周辺を反省するのがよいのかもしれない。

話が大きくなりそうだ。はにかみがちな近藤さんに笑われそうである。私はシャイではないので、法螺をふくことにする。

経営学は、昔から、なかなか研究のしづらい分野であった。近藤さんも、学生の頃、聴かれたかもしれない。「経営学は経営に関する諸学である」。当時は、何の変哲もない平凡な説明にしか聞こえなかった。しかし、今なら、違った風にも、聞こえてくる。あれは、教授の嘆息であったのか、あるいは一つの決断であったのか。

学問的な文脈は別として、要は、経営学は現実の経営を総合的に扱わざるを得ないということだ。日常の文脈になおしてみる。経営学はヒト、モノ、カネの全般を適時、処方することを期待されている。経営学専攻者の難題は、このような総合性の課題と、自らがどのように、折り合いをつけて、取り組み続けるかにある。

近藤さんの話に戻ろう。現代的な大企業とは異なって、ハントヴェルクは、そこにおけるヒト、モノ、カネが、いわば、不可分の繋がりにある。ハントヴェルクの経営は同時的な解決を迫られている。近藤さんは、その専門とされた研究対象の性質から、一般の経営研究者にもまして、経営学への総合的な把握を突き付けられていたように思われる。

私の感想では、近藤さんの総合性への関心は、ひとり研究の部面にとどまらず、教育の部面にも滲みでていたのではないだろうか。たとえば、近藤さんは、法経商コ - スの在り方について、絶えず、法律、経済、商学の垣根をこえるかたちでの制度づくりを強調されてきた。あるいは、近藤さんの講義案内に、経営はヒト、モノ、カネだとして、バランスよく、毎年のシラバス

が計画されていたことが思い出される場所である。近藤さんの近時のシラバスは、時代状況の変化に並行し、このヒト、モノ、カネの兼ね合いを微妙に、変化させていたことが、とりわけ、印象に深い。

私の理解するところ、近藤さんは、現場主義の人、あるいは、鬼神を語らないとでもいえる人であった。若い頃には、参禅されていたようだ。鬼神を語らないことは禅の特性と関わるのだろうか。時折の話に、どんな坊さんにも、悟りなどないよとのことだった。私は耳も目もよくないから、聞き違いだったのかもしれない。鈍な坊さんには、悟りはないだったのだろうか。大切な区別は、別の機会に、ゆっくりとお聞きしたい。

近藤さんについては、私には、忘れがたい一瞬がある。いつのことだっただろう。私は一冊の本をかかえる近藤さんとすれ違ったことがある。町工場を語る小関智弘の一冊であったことに、後日、気がついた。近藤さんの専門からは、何の不思議もない書物だが、今となっては、そのときの戸惑いを恥じる次第である。以来、なぜか、その一冊のタイトルが、近藤さんを、いつも、思い出させる。「春は鉄までが匂った」。